

「根の歌」

街角でふとこんな歌が聞こえてきました。

咲き誇る 花を見れば 土の下の根を思え

凍てついた冬を生きた 土の中の根を思え

調べましたところ、コーラスジャパンというグループの歌でした。

私は北海道の生まれで、小さい頃は背丈ほども雪が積もる地域で育ちました。

そして学校へと通う道すがら、雪の間から芽吹く草花を見て春の訪れを感じたものです。そんな郷愁の念とともに、この歌はもっと深い意味が込められているのではないかと感じました。

真宗はご縁というものを大切にします。

なぜなら「私」というものはなく、さまざまなご縁が合わさって今の私を私たらしめているからです。

しかし実際は、「私」というものがまずあって、周りのものもあると考えてしまいがちです。まず花があって、それに付随して根があるのだというようなものの考え方です。それは逆さまの考え方であり、「迷いのもとであるぞ」と先達からさまざまな言葉で伝えられてきていると思うのです。

人を見ればその人の生涯に思いを馳せ、その御苦勞を偲べ

仏様の教えに遇えるということは、今まさにここまで私一人に仏法を伝えようとして下さった先達のご苦勞、そして「仏法聴聞に励めよ」と勧めてくださった歴史こそ、私どもを育ててくださった深い根と言えましょう。

人にはそれぞれ歴史があり、仏法がお釈迦様より私に伝えられるまでにもまた長い長い歴史があったのです。それを思うと様々なご縁に頭が下がらずにはおれません。根がしっかりしてないと草木も倒れてしまうように、人も仏法という土台がないとしっかりとした歩みはできません。

自分の人生の上で大輪の花を咲かせられるかどうかは、どれだけ根を見つけるか、つまり仏の教えに自分を尋ねていくかという事ではないでしょうか。